

3 5 間伐木の市場性について

盛岡営林署 久保 武 典

1 はじめに

現在、間伐木の収穫調査は、収穫調査規程及び間伐の要領に基づいて行われていますが、立木調査時点では、売払い後の間伐材がどのような過程で一般市場に流れ、利用されているのかあまり理解されていませんでした。そこで、市場が求める情報を的確に判断することによって、間伐木の選木に効果的な成果を上げ、かつ間伐木の販売の向上に少しでも役立てるために、間伐木の市場性について調べてみました。

今回は、私が管轄している外山森林事務所部内の間伐対象林分の大半がカラマツ林であることから、カラマツ材の加工流通について、特に初回間伐材に多い小径材についての調査を行い、今後の収穫調査の参考にしたいと考えました。

2 調査の方法

調査は、盛岡市近辺の製材業者へ出向き、加工状況、販売状況、一般的な利用方法そして今後の見通しなどについて聞き取りなどの方法により実施しました。

対象とした製材業者は、主にカラマツ材を取り扱っている4製材業者ですが、その内2社は、比較的カラマツ材の取扱割合が少なかったが、どのような用途に使用されているのか参考にするため合わせて調査してみました。

3 調査の結果

間伐材の一般的な用途については、建築材、合板材、柵材、杭材、チップなどですが、特に利用価値が低いとされる初回間伐材は、小径の立木が多いため、直材が採材上有効とされ、曲りのあるものは、主にチップ用とされています。

しかし、最近チップ市場も悪化しつつあることから、曲りの多い材は敬遠されがちであり、まして初回間伐は小径の立木であるのに加え、新たに搬出道の作設も伴うことからコストの増加が生じるなど製材業者にとって購入しづらいとのことでした。

調査した4社の内、比較的カラマツの取扱量が多い2社については、

月平均1,000m³～1,200m³の取扱量があり、

① その内訳は 製材用 一約600m³ 55%
製材用外一約500m³ 45% であり、

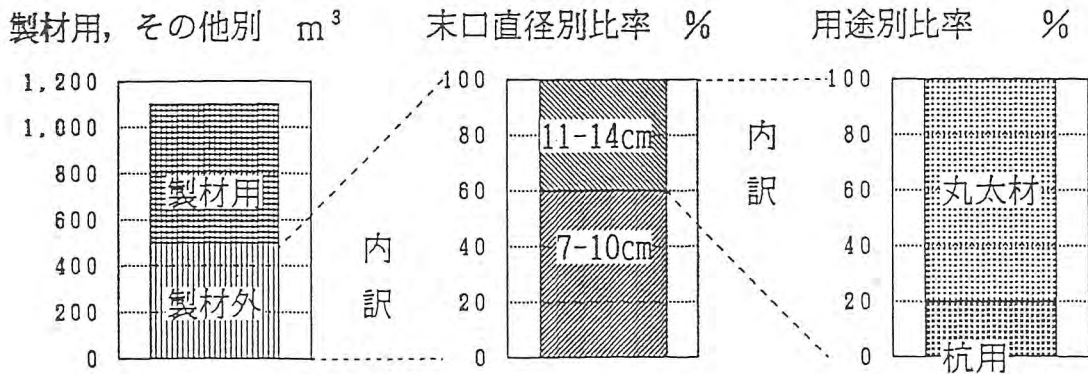
② 製材用外の末口直径別比率では、

7cm～10cm 一60%

11 cm ~ 14 cm --- 40%

③ 11 cm ~ 14 cmの内訳は、

土木工専用 { 杭材 ----- 20%
丸太材 ----- 80%でした。



そこで注目されたのが、短尺であり曲りの苦にならない杭材でした。

最近、土木工事等の増加に伴い杭材の需要が高まり、今後は、カラマツの初回間伐材の利用が促進されていくのではないかとと思われることから、杭材に利用される細丸太の特徴について調べてみました。

それによると、

- ① 末口直径は 7 cm ~ 13 cm
- ② 長さは 65 cm ~ 4 m (取引先の注文による)

であり、主な注文は長さで2 m ~ 4 mのものが多ということでした。

土木工専用材は、土留め用、水道工事等のヒューム管の設置用、水田の排水工の台用として主に使用されているとのことでした。

また、会社によっては、見栄えが良く、乾燥が早く耐久性が増すことから、機械により樹皮を剥いて出荷したり、土中に打ち込み易いように機械により鉛筆状に加工したりと、杭材加工用の機械化が進んでいるところもありました。

カラマツ間伐材の特殊な利用方法としては、径級14 cm以上の材について、木工用の板材に加工して、それをさらに合板状に組み合わせ、円形に形を整えてワイヤーや電線等を巻き付るドラムのツバ等に仕上げ出荷している例もありました。

さて、ここで当署の治山現場における間伐材の使用例についてご紹介いたします。

現場は国生協による簡易治山工事箇所、斜面に堆積した崩壊土砂を安定させ、森林に復旧させることを目的としたもので、その工法として、丸太積土留工及び丸太法枠工等を採用しています。使用材は主にアカマツ材なのですが量的には、約0.03 haに、

丸太（皮剥き） 2 m 末口8～10 cm 495本 単価550円/本
杭（皮剥き）65～70 cm 末口8～10 cm 395本 単価250円/本
となっており、少なくとも胸高直径12 cm以上の材が使用されています。

当署治山係では、土留等における木質系資材の有効性をリーフレットに作成し、間伐材の需要促進に努めており、この他の現場でも多くの間伐材が使用されています。

出荷先は、各社まちまちなのですが、土木用材については、東北6県をはじめ、関東方面への出荷が約90パーセント以上ということであり、土木工事の発注が多い関東方面に重点が置かれているようです。

出荷時期については、景気の影響をまともに受けることから変動もあるようですが10月～4月が需要のピークであり、そのピーク時までには材の確保が必要であるため、常に材の供給が必要ということです。

4 まとめ

(1) 林分の最下層にある胸高直径6 cm, 8 cmの調査は山の掃除にはなるが、市場性から言うとチップにしかならず、また調査の手間、保育効果が低いなどから、調査する必要がないと判断されます。

(2) 資材としては、直材が最も望ましいのですが、曲りのある木についても、2 m～4 mの直材が採れるものであれば市場性から言って差し支えないと判断されます。

曲りの多い木については、保育効果の観点からして、まず形質不良木を除去しなければならないことから必然的に調査対象木となるため、利用面でも、あまり曲りの苦にならない長さ70 cm以下の短尺ものがより利用されるような需要開発、需要拡大が必要と思われます。

(3) 最近では、製材業にもコンピューターによる機械管理が導入され、径級の選別から、直材曲材の判定なども行われているなど、コストダウンを図るために様々な工夫がなされているところですが、現場作業員の材の枝払いが不完全なため、一部の機械が停止し、流れ作業の工程がストップして製材過程に大きなロスを生じることもあるとのことで、流れ作業の工程ダウンを避けるために、現場における造材技術向上も大切な要因と思われます。

(4) 今回の調査の中で列状間伐を増やしてほしいと多くの業者から要望が出されました。当署管内には、現在1台のプロセッサが導入されておりますが、今後さらに4台程度の導入が見込まれているようです。

プロセッサ利用による間伐材の搬出が多くなるに従い、ますます列状間伐への要望が高まってくるものと考えられます。調査に携わる基職の方からも、比較的調査が容易だとの声があるほか、極印の簡略化などもあり、高性能機械による搬出も容

易なように、今後の初回間伐調査にあたっては、大幅に増やしていきたいと考えているところです。

5 おわりに

間伐材の販売について色々と難しさが言われておりますが、今回の調査で製材業者の方々もニーズに合わせて機械類の導入を図るなど様々な販売努力を重ねている姿勢に触れることができました。

用途の開発など今後にも大変な課題が多くあるわけですが、コスト的に見合えばより多くの間伐材需要が見込まれるものと考えるところであり、多額の出費を伴う搬出路整備もさることながら、今どのような加工、利用がなされていてどのようにすればコストダウンを図れるか等の買い手側の情報を知ることにも大変重要なことと思います。

今回の調査に当たって多くの方々から温かいご協力をいただき、良い思い出とすることができました。

私が担当する外山森林事務所の人工林を立派に育て、後世にお渡しできるよう、調査により得たものを念頭に、頑張っていきたいと思っています。

終わり